

生活の中の
仏教語

布施



ほっと通信編集委員 真山隆道

「布施」と聞くと最近では和尚さんに差し上げる金銭のことを、思い浮かべる方が多いかと思いますが、それは一部のことで、実はもっと深く広い意味があることをお話したいと思います。

「布施」とは、古代インドの言葉であるサンスクリット語の「ダーナ」を漢訳した語で、あらゆる意味での「施し」を意味します。古代インドから仏教のみではなく、同じような教えはキリスト教やイスラム教をふくめ世界の様々な宗教に見受けられますので、世界共通の考え方ともいえるでしょう。

仏教における「布施」の特色としては、三つの区分があり、出家修行者、仏教教団、貧窮者などに財物を施し与える「財施」と、教えを説き聞かせる「法施」、恐れをとり除いてあげる「無畏施」に分けられ、「三施」と言います。そしてそれは「三輪清浄」といって、与える人も、ものも、またそれを受ける人も、それぞれみな執着を離れた心にて行われる清浄なものなのです。

「布施」は悟りに到るための六つの実践徳目「六波羅蜜」の第一におかれ、体と言葉と心（身・口・意の三業）によって人に施すことが、欲望を離れ、迷いの世界を離れる実践であると説かれております。

それでは、私たちの日々の生活の上でどのようなことができるのでしょうか。その参考として、「無財の七施」をご紹介します。もし何も持っていなかったとしても布施はできるのです。①眼施（やさしい眼差しで接する）②和顔施（にこやかな笑顔で接する）③言辞施（やさしい言葉を掛ける）④身施（身をもって施す）⑤心施（思いやりの心で接する）⑥床座施（座る場所や敷物を与える）⑦房舎施（休息の場を与える）の七つです。

人にもものを与えたり、何かをしてあげることは意外とむずかしいことです。「布施」で大切なことは、「己の欲せざるところ・ものを施すことなかれ」と言われており、相手の身になって考えることが大切なのであって、自己満足のおしつけになってはいけません。思いやりの心を持って布施行を行じてまいりましょう。